

目 次

徹底解説 本試験問題シリーズの刊行にあたって

試験制度解説編

1. IT サービスマネージャ試験の概要	8
2. 受験ガイド	17
3. 令和2年秋期の試験に向けて	19

平成29年度秋期 問題と解答・解説編

午前Ⅰ問題	H29- 1
午前Ⅱ問題	H29- 17
午後Ⅰ問題	H29- 31
午後Ⅱ問題	H29- 51
午前Ⅰ問題 解答・解説	H29- 57
午前Ⅱ問題 解答・解説	H29- 72
午後Ⅰ問題 解答・解説	H29- 85
午後Ⅰ問題 IPA 発表の解答例	H29- 96
午後Ⅱ問題 解答・解説	H29- 99
午後Ⅱ問題 IPA 発表の出題趣旨と採点講評	H29- 109

平成30年度秋期 問題と解答・解説編

午前Ⅰ問題	H30- 1
午前Ⅱ問題	H30- 19
午後Ⅰ問題	H30- 33
午後Ⅱ問題	H30- 53
午前Ⅰ問題 解答・解説	H30- 59
午前Ⅱ問題 解答・解説	H30- 77
午後Ⅰ問題 解答・解説	H30- 91
午後Ⅰ問題 IPA 発表の解答例	H30- 103
午後Ⅱ問題 解答・解説	H30- 106
午後Ⅱ問題 IPA 発表の出題趣旨と採点講評	H30- 117



令和元年度秋期 問題と解答・解説編

午前Ⅰ問題	R1-	1
午前Ⅱ問題	R1-	17
午後Ⅰ問題	R1-	33
午後Ⅱ問題	R1-	53
午前Ⅰ問題 解答・解説	R1-	59
午前Ⅱ問題 解答・解説	R1-	78
午後Ⅰ問題 解答・解説	R1-	91
午後Ⅰ問題 IPA 発表の解答例	R1-	100
午後Ⅱ問題 解答・解説	R1-	103
午後Ⅱ問題 IPA 発表の出題趣旨と採点講評	R1-	117

<出題分析>

IT サービスマネージャ試験	出-	1
(1) 午前問題出題分析	出-	2
(2) 午前の出題範囲	出-	14
(3) 「システム監査基準」, 「システム管理基準 (骨子)」	出-	24
(4) 午後Ⅰ問題 予想配点表	出-	68

商標表示

各社の登録商標及び商標、製品名に対しては、特に注記のない場合でも、これを十分に尊重いたします。

3. 令和2年秋期の試験に向けて

ここでは、令和元年秋に実施された IT サービスマネージャ試験の試験分析と講評を述べます。受験する際の参考にしてください。

3-1 試験全体について

新試験制度になって 11 回目の試験となりました。IT サービスマネージャ試験の全体的な難易度としては、例年と同様のレベルと判断します。相変わらず、ITIL と JIS Q 20000 の両方の観点からの出題が見られます。これらの用語や考え方を中心とした出題が顕著なので、ITIL 及び JIS Q 20000 に関する十分な学習が合格のためには必要です。

午前Ⅱは、例年と比べて傾向に大きな変化はないのですが、相変わらず過去問題からの再出題が多く、知識を問う出題が中心で難易度は「標準的」と判断します。例年どおり、IT サービスマネジメント分野以外の分野からも一定の割合で出題されているので、サービスマネジメントだけを学習するのではなく、過去問題を中心に偏りなく出題分野を学習することが望まれます。

午後Ⅰの 3 問は、様々な分野からバランスよく出題され、特定の分野だけの知識では取り組みにくいと考えられますが、問題そのものの難易度は「標準的」と判断します。

午後Ⅱの 2 問は、より上位の総合的なマネジメントに焦点を当てた問題になっており、題意を反映した十分な事例の内容詳細を説明する必要があります。難易度は「標準的」と判断します。

3 年間の応募者数、受験者数、合格者数を示しますが、応募者は減少傾向にあります。

年度	応募者数	受験者数 (受験率)	合格者数 (合格率)
平成 29 年秋	5,779	3,932 (68.0%)	535 (13.6%)
平成 30 年秋	5,605	3,715 (66.3%)	530 (14.3%)
令和元年秋	5,121	3,388 (66.2%)	497 (14.7%)

図表 11 応募者数・受験者数・合格者数

3-3 午前Ⅱ：多肢選択式問題について

重点分野はサービスマネジメントです。25問中6割に当たる15問がサービスマネジメント分野からの出題でした。一方で、もう一つの重点分野であるプロジェクトマネジメント分野からの出題は2問と少なく、この傾向も例年どおりです。その他の分野の問題としては、コンピュータシステム、データベース、ネットワーク、セキュリティ、システム監査、法務など、各分野からやはりまんべんなく出題されており、受験者が幅広い知識をもっていることを確認するような出題傾向が続いています。出題分野の割合は過去2年とほとんど変わりません。

新傾向問題については、平成30年秋の傾向が維持され8問でした。分野別に見ると、サービスマネジメントの分野では、ITILやJIS Q 20000の考え方に基づいて問われている問題が3問、さらにデータセンタにおけるサーバ仮想化に関して1問が新傾向として出題されています。また、コンピュータシステム、データベース、プロジェクトマネジメント、システム監査で4問の新傾向問題がありました。

ITサービスの基盤が仮想環境やクラウドサービスに移行することに伴って、仮想化による物理サーバの集約に関する問題や、「働き方改革」を反映したと思われる労働基準法に関する出題があり、幅広い知識を求める傾向があると考えられます。一方、平成30年には出題されなかった計算問題が復活し、3問が出題されました。各分野からの出題数は次のとおりです。

大分類	中分類	平成29年秋	平成30年秋	令和元年秋
コンピュータシステム	コンピュータ構成要素	1	1	1
	システム構成要素	1	1	1
技術要素	データベース	1	1	1
	ネットワーク	1	1	1
	セキュリティ	2	2	2
プロジェクトマネジメント		3	3	2
サービスマネジメント	サービスマネジメント	14	14	15
	システム監査	1	1	1
企業と法務	法務	1	1	1
合 計		25	25	25

図表13 午前Ⅱ試験 分類別平成29年秋～令和元年秋の出題数

3-6 令和2年秋の試験に向けて

午前Ⅱ，午後Ⅰ，午後Ⅱを通じて，ITサービスマネージャ試験に合格するにはITIL及びJIS Q 20000の知識がキーとなります。これらの用語や考え方の理解が不十分な場合，直接的には午前Ⅱや午後Ⅰの問題への対応が困難になります。それだけではなく，午後Ⅱの論述式試験において，問題の要求する文脈や状況に対応するのも困難になります。ただし，問われている知識はそれほど難しい内容ではありません。ITILやJIS Q 20000そのものの試験ではないので，アイテックのテキストや問題集をきちんと学習していれば十分に対応可能です。

午前Ⅱ試験は，インプット学習としてITIL及びJIS Q 20000を中心とした学習が重要ですが，ITサービスマネジメント分野や，プロジェクトマネジメント，システム監査などの範囲からも広く出題されていますので，過去問題を中心に，問題集を活用した幅広い学習が必要です。

午後Ⅰ試験は，単純な知識を問う問題はほとんどありません。必要となるスキルは，問題文を基に解答を導き出す思考能力です。過去問題を何度も繰り返し解いてみるなど，問題文を読解する学習訓練が必要になります。幅広いテーマからの出題が見られるので，偏った学習ではなく，幅広い学習が望まれます。

午後Ⅱの論述式試験は，問題文の趣旨に従って忠実に論述することが求められます。しっかりと基礎知識を身に付けた上で，論述式試験対策を実施しましょう。論述の制約事項やキーワードに注意して，適切な題材を事前に準備していくことが重要です。ITサービスマネジメントの考え方をしっかり理解し，「サービスマネジメント」の観点がはっきりと伝わるような表現が望まれます。単に担当者の視点にならないように，ITサービスマネージャとしての視点で論述することも大切です。「サービス」及び「マネジメント」の観点を意識してください。また，「あれをしました，これをしました」という物語や日記のようなエピソード・実施経緯の羅列では，論点を見い出せない文章になってしまい高い評価は得られません。ITサービスマネージャとして，対象事例について，何を重要視してどう判断したのか，そのプロセスや理由が明確で，具体的に採点者に伝わる内容を，2時間以内に論述しなければなりません。午後Ⅱの論述式試験でしっかりと論述できたと思っただにもかかわらずA評価にならなかった受験者は，一度，添削指導を受けることをお勧めします（アイテックの論文対策コースをぜひご活用ください）。

●令和元年度秋期

午前Ⅱ問題 解答・解説

問1 エ

サービス・パイプライン (R1 秋・SM 午前Ⅱ問1)

ITIL 2011 edition で定義されているサービス・ポートフォリオとは、サービス提供者が管理している全てのサービスを事業場の価値に関して説明するものであり、そのために必要となるツールなども含んでいる。これには、サービス・パイプライン (提案中や開発中のもの)、サービス・カタログ (稼働中や提供可能なもの)、及び廃止されるサービスという三つの区分があり、過去から未来にかけてのITサービスの一覧である。

すなわち、サービス・ポートフォリオにおけるサービス・パイプラインは、検討中、又は開発中のサービスの一覧である。したがって、正解は(エ)である。

なお、サービス・パイプラインは、通常、顧客には公開されておらず、サービス提供者の中で管理している。

ア：顧客に提供することが可能なサービスは、サービス・カタログに分類される。
イ：停止されたり取り消されたりするサービスは、現在、サービス・カタログに区分されていても、いずれ廃止されるサービスに分類されることになるものである。

ウ：サービスオペレーション段階で実行されているサービスは、サービス・カタログに分類される。

問2 イ

JIS Q 20000-1:2012 が規定しているもの (R1 秋・SM 午前Ⅱ問2)

JIS Q 20000-1:2012 の序文では、「この規格は、サービス提供者がサービスマネジメントシステム (以下、SMS という。) を計画、確立、導入、運用、監視、レビュー、維持及び改善する場合の統合されたプロセスアプローチを要求する」と規定している。JIS Q 20000-1:2012 の全体を通して、サービスを管理するために、サービス提供者が具体的にどのような活動を実施しなければならないかを要求事項として規定している。したがって、(イ) が正解である。

ア：JIS Q 20000-1:2012 では、「適切なツールを使用することができる」と規定している。しかし、製品又はツールの具体的な仕様までは規定していない。したがって、誤りである。

ウ：情報セキュリティマネジメントシステムに対する要求事項は、JIS Q 27001 が規定している。JIS Q 20000-1:2012 では、JIS Q 27001 との関連に関する記述はあるが、情報セキュリティマネジメントシステムに対する要求事項を直接

● 令和元年度秋期

午後 I 問題 解答・解説

問 1 継続的サービスの改善

(R1 秋・SM 午後 I 問 1)

【解答例】

- [設問 1] (1) エスカレーション先が技術課の場合、初回回答までの経過時間が長い。
 (2) エスカレーション先の技術課に依頼することなく、対応完了となった問合せの割合
 (3) 完了日時欄が“受付”又は“対応中”
 (4) 定期的な顧客アンケート調査の実施
- [設問 2] SD への問合せ総件数に占める FAQ に掲載されている問合せ件数の割合の減少率
- [設問 3] (1) 3
 (2) 名刺画像の送信から顧客 DB に登録されるまでの時間帯別の平均待ち時間

【解説】

情報システム会社が提供する営業支援業務に関するクラウドサービスと、問合せ対応を実施するサービスデスク (SD) の継続的サービス改善を題材にした問題である。IT サービスにおいて効果的なサービス改善に取り組むためには、データの収集と加工、分析を通して改善策を検討していくことが重要である。本問では、改善プロセスに沿って、データを収集し、データの加工などを通じて、社内サービスの目標値や KPI の目標を達成できていない場合の原因を分析し、サービスとプロセスの改善方法を策定するまでの一連の実務能力を問うものである。

[設問 1]

- (1) [SD の改善] について、サービス目標値の達成が危ぶまれた事象に共通する内容を表 3 から判断して解答する。冒頭文の最終段落に「SD では、問合せに対する初回回答を 3 時間以内 (SD の営業時間外となる場合は、翌営業日の 12 時まで) に返信することを社内サービスの目標値として定めている」という記述がある。そこで表 3 の初回回答日時 (経過時間) を見ると、項番 3 が 160 分、項番 7 が 175 分とサービス目標値ギリギリで回答していることが分かる (項番 8 は除外)。この二つの案件の共通点は、エスカレーション先がいずれも技術課であることである。したがって、「エスカレーション先が技術課の場合、初回回答までの経過時間が長い」な

●令和元年度秋期

午後Ⅱ問題 解答・解説

問1 環境変化に応じた変更プロセスの改善について

(R1 秋・SM 午後Ⅱ問1)

【解説】

IT サービスマネジメントにおける変更管理プロセスの構築・管理は、ITIL におけるサービストランジションでの取り組みである。IT サービスマネジメントを実践する組織では、変更管理の活動として、変更要求の受付と記録から変更要求のクローズに至る一連のプロセスを整備し、変更に対する申請や許可を適切に処理することになる。組織として変更における利益とリスクの管理はしているが、アジャイル開発など俊敏な対応が求められる環境変化の影響によって、昨今では既存の変更プロセスでは問題が発生する場合がある。

本問題では、このような問題点の例として次の二つの事例を挙げている。

- ① アジャイル開発で作成されたりリリースパッケージの稼働環境へのデプロイメントにおいて、変更プロセスの実施に時間が掛かる。
- ② 新規のサービスをサービスデスクで作業可能とする変更要求の決定に時間が掛かる。

従来は変更プロセスにおける統制手続を重視し、処理に時間がかかっても大きな問題になることがなかったかもしれないが、問題文にも「俊敏な対応を求める昨今の環境変化」とあるように、昨今はあらゆるビジネスに対してスピードが求められる、ビジネスの変化に対応したシステムのリリースや新たなサービス提供を俊敏に行う必要がある。これらのことから、統制手続においてもそのようなスピード感が必要とされる局面が発生している。問題文においては、このような状況に対応するための施策として、

- ① アジャイル開発チームへの権限の委譲、プロセスの簡略化などデプロイメントの迅速化
- ② サービスデスクでの標準変更の拡大を迅速に行うためのプロセス見直しと利害関係者との合意

が挙げられている。施策としては「権限の委譲」、「プロセスの簡略化」、「プロセス見直しと利害関係者との合意」などを実施することによって、変更プロセスに俊敏な対応をすることが示唆されており、論文の構成においてはこれらの施策あるいは類似の施策を用いた変更プロセスの改善を念頭に置くのがよい。一方、これらの「俊敏な対応」を実施した場合、プロセスが簡略化あるいは省略されることによって、品質が低下することが懸念される。問題文においても「変更要求への俊敏な対応と品質の確保の両面に配慮する必要がある」との記述があることから、本問題においては変更プ

心掛けるとよい。

(論述例)

1.2. 既存の変更プロセスに影響を与えた環境変化

私は、A社情報システム部の担当者から次のような説明を受けた。

A社はWebショッピングサイトのリニューアルを計画し、アプリケーションの改修をC社に業務委託した。C社は3年前に設計・開発を行った実績があった。

リニューアル計画は、C社が6月から新機能の要件定義と設計を開始し、9～11月でシステム開発を行い12月中に総合テストを完了、1月からA社が受入れテストを行い3月に新システムに移行する予定であった。

12月になって、私がA社情報システム部の担当者に進捗を確認したところ、約1か月の遅れが発生しているという。新機能の要件定義と設計に想定以上の時間が掛かり、その影響で、1月中旬～2月には多数のリリースパッケージのデプロイメントが集中し、既存の変更プロセスの手続では時間が掛かりそうで、3月のシステム移行が困難であることが予想された。

[設問イ]

2. 変更プロセスの改善施策

2.1. 環境変化によって影響を受けた変更プロセスの概要

ここでは、設問アで論述した「既存の変更プロセスに影響を与えた環境変化の内容」を受けて、変更プロセスの概要について丁寧に論述する必要がある。具体的には、変更プロセスにおける申請手順や承認権限の所在、役割分担などである。変更プロセスにどのような問題が発生したかについては次節で論述することになるので、ここでは問題点までは言及せず、現状の変更プロセスについて具体的に説明する。その際、本問題では「俊敏な対応」と「品質の確保」が重要なテーマとなっていることから、現状の変更プロセスにおける変更に必要な時間や品質の状況については必ず論述する必要がある。ここでは問題点を具体的に論述する必要はないが、次節の問題点に繋げるための前提条件を示すという点に注意しながら論述する。

(論述例)

2. 変更プロセスの改善施策

2.1. 環境変化によって影響を受けた変更プロセスの概要

B社にも関係する、A社の「システム運用規程」についての情報は次のとおりである。

A社は株式を上場した際にIT全般統制を整備し、システム運用に関する統制については「システム運用規程」とその付属文書に規定されている。今回は環境変化によって、変更プロセスが影響を受けることになった。

A社のシステム運用における変更プロセスの手順は次のとおりである。

IT サービスマネージャ試験

平成 29 年度秋期, 平成 30 年度秋期, 令和元年度秋期に行われた高度午前 I (共通知識) 試験, IT サービスマネージャ午前 II 試験を分析し, 問題番号順と, 3 年分を合わせた「午前の出題範囲」の出題分野順にまとめた表を掲載します。

また, 出題分野の基になっている「午前の出題範囲」の詳細も掲載します。

IT サービスマネージャ試験を受験する際に, 出題の分析は重要な資料になります。

(1) 午前問題出題分析

・問題番号順

平成 29 年度秋期 高度午前 I (共通知識) 試験

平成 29 年度秋期 IT サービスマネージャ 午前 II 試験

平成 30 年度秋期 高度午前 I (共通知識) 試験

平成 30 年度秋期 IT サービスマネージャ 午前 II 試験

令和元年度秋期 高度午前 I (共通知識) 試験

令和元年度秋期 IT サービスマネージャ 午前 II 試験

・高度午前 I (共通知識) 試験の出題範囲順

(平成 29 年度秋期, 平成 30 年度秋期, 令和元年度秋期)

・IT サービスマネージャ 午前 II 試験の出題範囲順

(平成 29 年度秋期, 平成 30 年度秋期, 令和元年度秋期)

(2) 午前の出題範囲

(3) 「システム監査基準」, 「システム管理基準 (骨子)」

(4) 午後 I 問題 予想配点表

- ・分野の「T」はテクノロジ系、「M」はマネジメント系、「S」はストラテジ系を表しています。
- ・大、中、小は、「午前の出題範囲」に対応しています。

・問題番号順

平成 29 年度秋期 IT サービスマネージャ午前Ⅱ試験

問	問題タイトル	正解	分野	大	中	小	難易度
1	ITIL のサービストランジション段階に対応する説明	ア	M	6	15	1	4
2	総合評価点の算出	ウ	M	6	15	1	3
3	合意されたサービスマネジメントの目的を定義する際の考慮点	イ	M	6	15	1	4
4	サービスパイプライン	エ	M	6	15	1	4
5	インシデントの段階的取扱い	イ	M	6	15	3	4
6	サービス継続及び可用性管理プロセス	イ	M	6	15	3	3
7	リアクティブな可用性管理の活動で用いる技法	ウ	M	6	15	3	4
8	インシデント及びサービス要求管理	イ	M	6	15	3	3
9	稼働品質率によるシステムの評価	ウ	M	6	15	3	3
10	サービスマネジメントシステムの関係プロセスで実施する内容	ア	M	6	15	3	4
11	IT サービスマネジメントの変更管理規程に記載する規則	ア	M	6	15	3	4
12	インシデント・モデルのメリット	ウ	M	6	15	3	3
13	有人オペレーションサービスに必要な人数	イ	M	6	15	4	3
14	UPS 設備の冗長性に関する基準ティア 3 に該当する構成	ウ	M	6	15	5	4
15	内部統制に効果的な職務の分離	ア	M	6	16	2	3
16	プロジェクトで必要な作業とメンバの関係	ウ	M	5	14	1	3
17	ディンジョンツリーにおける期待金額価値 (EMV) の計算	ア	M	5	14	7	3
18	プロジェクト管理における傾向分析	ウ	M	5	14	6	4
19	MLC フラッシュメモリの特徴	ウ	T	2	3	2	3
20	SAN におけるサーバとストレージの接続形態	イ	T	2	4	1	3
21	WAL (Write Ahead Log) プロトコルの目的	ウ	T	3	9	4	3
22	TCP コネクションが設定される場所	イ	T	3	10	3	3
23	XML 署名の特徴	ウ	T	3	11	1	3
24	ソフトウェア開発元/発行元の証明書	ウ	T	3	11	1	3
25	ソフトウェアの使用許諾契約の成立	ウ	S	9	23	3	3

・問題番号順

令和元年度秋期 高度午前 I (共通知識) 試験

問	問題タイトル	正解	分野	大	中	小	難易度
1	集合演算	ア	T	1	1	1	2
2	待ち行列モデルにおける回線利用率の計算	イ	T	1	1	2	3
3	AI の機械学習における教師なし学習	ウ	T	1	1	3	3
4	単方向リストでポイントをたどる回数が最も多いもの	エ	T	1	2	1	2
5	平均アクセス時間を表す式	イ	T	2	3	2	2
6	一時ファイルを作成する磁気ディスクに必要な容量	ウ	T	2	5	1	3
7	キャパシティプランニングの目的	イ	T	2	4	2	3
8	エネルギーハーベスティングの適用例	ウ	T	2	6	1	3
9	媒体障害発生時のデータベースの回復法	エ	T	3	9	4	2
10	CSMA/CD の説明	ア	T	3	10	2	3
11	フォワードプロキシの説明	ウ	T	3	10	2	3
12	NAPT 機能によるセキュリティ上の効果	エ	T	3	11	5	3
13	チャレンジレスポンス認証方式	エ	T	3	11	1	3
14	ファジングに該当するもの	ウ	T	3	11	5	3
15	虹彩認証の説明	ウ	T	3	11	1	3
16	モデレータが主導するレビュー技法	ア	T	4	12	4	2
17	自社で開発したソフトウェアの他社への使用許諾	エ	T	4	13	2	3
18	PMO の役割の説明	ウ	M	5	14	1	3
19	アローダイアグラムの所要日数の短縮	ウ	M	5	14	6	2
20	インシデント及びサービス要求管理として行うもの	エ	M	6	15	3	2
21	クラウドサービス上の情報消失の予防に関するチェックポイント	ウ	M	6	16	1	4
22	システム監査手続で利用する技法	ア	M	6	16	1	3
23	BCP の説明	エ	S	7	17	1	3
24	4 段階評価による目標達成度の計算	イ	S	7	17	1	2
25	ファウンドリサービスの説明	エ	S	7	18	3	3
26	PPM における花形の説明	ア	S	8	19	1	2
27	CRM の説明	ウ	S	8	19	4	2
28	RPA の説明	ア	S	8	21	1	3
29	損益分岐点分析	ア	S	9	22	3	3
30	著作権法上適法である行為	エ	S	9	23	1	2

(3) 「システム監査基準」, 「システム管理基準 (骨子)」

経済産業省

システム監査基準

平成 30 年 4 月 20 日改訂

前文 (システム監査基準の活用にあたって)

[1] システム監査の意義と目的

システム監査とは、専門性と客観性を備えたシステム監査人が、一定の基準に基づいて情報システムを総合的に点検・評価・検証をして、監査報告の利用者に情報システムのガバナンス、マネジメント、コントロールの適切性等に対する保証を与える、又は改善のための助言を行う監査の一類型である。

また、システム監査は、情報システムにまつわるリスク (以下「情報システムリスク」という。) に適切に対処しているかどうかを、独立かつ専門的な立場のシステム監査人が点検・評価・検証することを通じて、組織体の経営活動と業務活動の効果的かつ効率的な遂行、さらにはそれらの変革を支援し、組織体の目標達成に寄与すること、又は利害関係者に対する説明責任を果たすことを目的とする。

[2] システム監査基準の意義と適用上の留意事項

「システム監査基準」(以下「本監査基準」という。)とは、情報システムのガバナンス、マネジメント又はコントロールを点検・評価・検証する業務 (以下「システム監査業務」という。)の品質を確保し、有効かつ効率的な監査を実現するためのシステム監査人の行為規範である。

本監査基準は、組織体の内部監査部門等が実施するシステム監査だけでなく、組織体の外部者に依頼するシステム監査においても適用される。

本監査基準は、情報システムの安全性、信頼性、準拠性のみならず、情報システムの戦略性、有効性、効率性等の監査もカバーし、かつ、中小規模の企業や、各府省庁、地方公共団体、病院、学校法人等、各種組織体が各種目的をもってシステム監査を行う場合にも利用できるように、汎用性のある内容となっている。

なお、組織体の内部監査人がシステム監査を実施する場合には、日本内部監査協会の「内部監査基準」又は内部監査人の国際組織 IIA の「専門職的实施の国際フレームワーク」を、また情報セキュリティ監査制度に基づく監査を実施する場合には、「情報セキュリティ監査基準」をあわせて参照することが望ましい。